

特殊性を普遍的に解明

評論 論

—— 最上 敏樹

加藤周一氏の数多い著作のうち、最も加藤氏らしいと思われもの一つは、「ポール・ロワイヤール論」と題された小文である(かもがわ出版刊「小さな花」所収)。「ポール・ロワイヤール論」とは、十七世紀フランスの、論理学的の本。その本を加藤氏は、「実に美しいと思う」と形容しているのだ。

「美しい」のは本の構成と記述である。たゞ「美しい」といふことについて、まず概念を作り、次に概念を結びつけて命題を作り、次いで命題を結びつけて推論を組み立て、最後に知覚や判断を結びつけて物事を秩序づける、と分解し説明していく。文章も、正統なフランス語のお手本と言つべきか、流麗でよどみなく、実に美しい。

加藤周一氏の論理的な均整

加藤周一氏はそれを、「広い問題を、理路整然として、簡潔明快に叙述し、そのために読者に、強い美的感動をよびます」と論評している。



加藤周一氏

知的作業の醍醐味実感

「美しい」のは本の構成と記述である。たゞ「美しい」といふことについて、まず概念を作り、次に概念を結びつけて命題を作り、次いで命題を結びつけて推論を組み立て、最後に知覚や判断を結びつけて物事を秩序づける、と分解し説明していく。文章も、正統なフランス語のお手本と言つべきか、流麗でよどみなく、実に美しい。

加藤周一氏の博識はあらためて言うまでもない。ホメロスも宮沢賢治も論じ、トプカピ宮殿も桂離宮も分析し、モンドリアンも俵屋宗達もすべ

文化に おける 時間と空間

加藤周一著「日本文化における時間と空間」

題材を通じてしか語りえないから、これはまっとうな方法である。ずっしりした質量を感じさせる本だ。その質量は、ここでもまた、論理の力に

「今」の日本文化が「大勢順応主義」に通ずるといふ確な批判も述べるが、日本文化が「ヘンな文化」だなどと言っているのではない。その美しい部分を、氏は誰よりもよく理解している。ただ、それが世界的には普遍性を持たない文化である、とは言つたのだ。その論証を加藤氏は、全く普遍的な方法を用いてやって見せた。知的作業の醍醐味とは、こいつらものかと、あらためて思ふ。

て視野に入れる。帝国主義時代の歴史も日本国憲法改定問題も縦横に論じてきた。だが、重要なのは博識であること自体ではなく、氏は何を論じても均整のとれた論理を崩さぬ点にある。それゆえにこそ氏の評論は、たとえ政治問題を扱っている場合でも政治的党派臭を帯びず、むしろ人々に対して知的刺激を与えるものとなるのだらう。ある人々にとつては「実に美しい」

(国際基督教大学教授)